民の心を測る⑥

曲げぬ数字 漢字救った

戦後の占領期、連合国軍総司令部（GHQ）が大がかりな「日本人の読み書き能力調査」を命じた。

日本語は漢字が多くてむずかしい。それが民主化を遅らせている。調査結果しだいで、ローマ字に変えてしまおう。そんな思惑があったらしい。

いま出版社に勤める高橋正樹（37）は、7年前、大学院で社会調査史を学んでいたときにこのことを知る。どんな調査だったのだろう？　中心になった柴田武を訪ねた。

柴田は言語学の大御所。昔の記憶をたどってくれた。

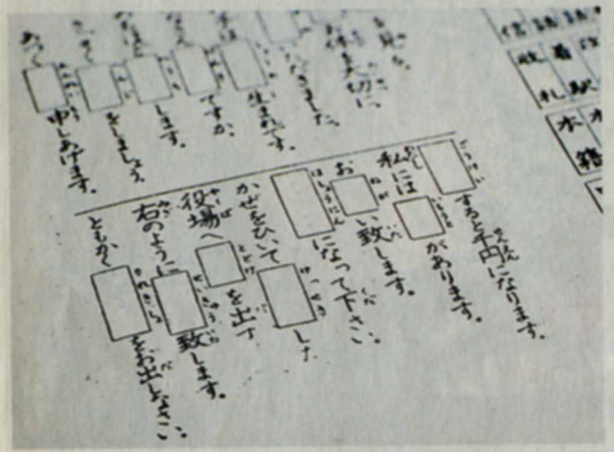
「GHQにジョン・ペルゼルという人がいた。彼とともに僕は調査をやることになったんですよ」

その1948年春、柴田は29歳。東大助手から読み書き調査のスタッフに選ばれた。仕事は出題づくり。だが、その先にローマ字化構想があることは知らされていなかった。

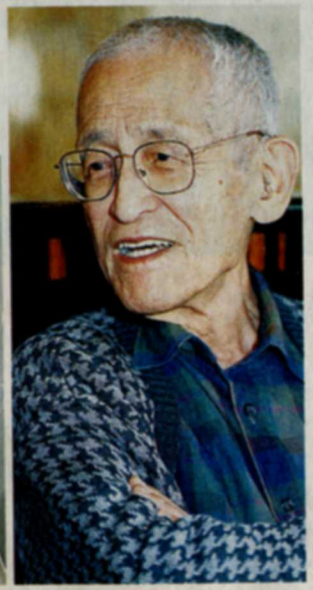
どんなテストにするか。まず手探りで始めたのは全国の新聞を集めること。日常生活に欠かせない言葉を抜き出す。「やってみると大変」。ストレスで一時、視力を失うほどだった。

私には〈いもうと〉があります。〈ほしょうにん〉になって下さい。ともかく〈りれきしょ〉をお出しなさい――。

柴田らがつくった漢字テストは今の小中学生が習うレベル。その年8月、全国で15歳から64歳の約1万7千人がテストを受けた。結果、読み書きできないとされた人はわずか2%。日本人は漢字がよく読めたのだ。



上 読み書き調査のテスト



左 柴田武さん

下 柴田里程さん

柴田はペルゼルに呼び出される。「字が読めない人が非常に多いという風にやってくれなきゃ困るということだった。はっきりはいわないが」

柴田は断った。「調査結果はねじ曲げられない」。ペルゼルは「そうだろうな」と無理押しはしなかった。ローマ字化はついえた。

柴田の話を聞いて高橋は改めて思った。「日本の運命を左右した大調査でした」

この読み書き調査は、科学的手法の基本、無作為抽出法（ランダムサンプリング）が初めて全国規模でつかわれた記念碑的な調査でもある。サンプル選びは、柴田と同い年の統計学者林知己夫に任された。

その林のもとにいた元長崎純心大教授の高倉節子（81）は、政友会代議士の娘で数学が大好き。サンプリングのための計算を一日中、手回し式の計算機でやった。

「実際にサンプルを抜くこともしましたよ」。小田原で物資配給台帳を見せてもらい、一定の間隔で人を選ぶ。大きな仕事にわくわくした。1日の睡眠は3時間。

「大和なでしことして、アメリカ人に日本人はダメだと思われたくなかったの」

このときの無理がたたって高倉は結核になる。闘病後、研究の道に入り、社会福祉をテーマに選んだ。「福祉は人々が何を望んでいるか、統計的に調べることが大事なんです」。恩師の林らとの調査がその後の人生の出発点になった。

高倉節子さん

慶応大教授の柴田里程（59）は柴田武の息子である。

「ぼくの名前『りてい』はリテラシー（読み書き能力）にちなんでつけた、と父はいっていました」

それほど若き日の調査に深い思いがあったのだろう。父の武は『新明解国語辞典』の編集に加わり、著書『常識として知っておきたい日本語』がベストセラーになってもいる。

「あの読み書き調査のあと、父は言語を客観的に調べていくようになった。私は統計学から入り、数字にとどまらない様々なデータ、たとえば言語も分析している。アプローチは違うけど、だんだんと父の世界に近づいてきた気がします」

武は昨年7月、88歳で亡くなった。「じつは父は旧制高校のころからローマ字論者だったんですよ」と里程。自分たちの調査が漢字を救ったことをのちに知っても、持論を曲げなかったという。

（吉田貴文）

毎日新聞社の本
〒100-8051東京都千代田区一ツ橋1-1-1〈ホームページ〉http://books.mainichi.co.jp/
●お求めは、書店または毎日新聞販売所で。●書名にはISBNコードを付記しました。ご注文等にご利用下さい。
勝間
日本
Life
なぜ日本人
国の将来に
「明日にワク
変えるため
カリスマ経
満を持して
「15の提言
【発売たち
ばっ
千年
現代
瀬戸
タイ
瀬戸
「人生
辰巳
大ベス
者が子
とルー
な漫画
争の果
その手
小林
上官の
を斬殺
昨春、
死から
生と死
人生の
未発表
NH
総合